

錦織監督

映画の現場から



●●●50

「本物」を伝えていく

本物は意外とさりげなく、目立たずにたえずいるもの。名優緒形拳さんと、そんな話をしたことがある。本物はいかにもそれらしく振る舞ったりする必要はない。分かる者には分かるから余計な説明も要らない、という話だったと思う。

和紙すき職人さんを緒形さんと一緒に訪ねた際、技術に目を奪われた。その翁は身なりなど全く気にせず、初めて会ったとは思えないほど気さくで笑顔の似合う自然体の人だった。自信があるからなのだろう。

本物はみんなが思っている常識とは違い、案外「らしくない」のかもしれない、という結論に至った。「結局、知られていようがまいが、本物は本物」と緒形さん。「それを見抜く力が必要だ」と。

いま私たちは「華やかな

古里から心のメッセージを



「平成の大遷宮」で新しくなった国宝の本殿(後方)を、特別拝礼で間近に拝む参拝者たち—出雲市大社町杵築東、出雲大社

「自立」情報や、予算をかけた過剰な宣伝に翻弄されてはいまいか。自分の意見より、他人の目を気にしてばかりいないか。

「はやっている」ということは一つの判断基準ではある。だが、自信があれば、自分の意見が流行と違っていてもいいはずだ。

違う趣味や違う考え方の者が集まっているのが社会。違いの中から文化が生まれる。だから面白い。みんなが同じ色の服を着て、同じ性能の車に乗っていたらつま

らない。日本国の歴史は、多くの違いを受け入れ、共存してきた歴史ともいえる。

大遷宮でにぎわう出雲大社。その物理的な大きさはもとより、古からの歴史、多くの伝承など、どれをとっても他にはない誇りうる世界の財産である。小さいころから、あまりにもさりげなく近くにあるから、その偉大さに気づかなかつた。全国を旅し、あちこちで出雲を感じることが多いのも、大神様への信仰心が古から全国に広がり、継承さ

れてきたという証しだ。

島根、出雲の文化、産業の歴史、風土、慣習、自然環境などは世界的にみて最先端であると確信する。時間がかかろうとも、少しずつ「本物」をみんなに伝えていくことが、映画の役割の一つだと私は思うようになった。

争いが絶えない世界の中で、おんぼろとした優しい心や地域のコミュニティが色濃く残る、わが古里からの心のメッセージが世界で求められている。

平成の大遷宮は、まさに絶好機。縁結びやスピリチュアルブームがきっかけで来県している多くの人たちが、本物のすごさに気づいてくれるのでは。そう期待するのは私だけではない。

サブカルチャーも悪くはない。だが、その先のメインカルチャー、すなわち「本物」はここにあるよ」という思いを込めて、いぶし銀のごとく日本の、古里の映画を撮り続けていきたい、と「甦りの年」にあらためて思う。第4金曜に掲載